

研究課題：歯周病予防・口腔ケアによる認知症発症・認知機能低下に対する抑止効果の検討

研究者名：道川 誠1）、渋谷恭之2）

所属：名古屋市立大学大学院医学研究科・神経生化学分野1）、名古屋市立大学大学院医学研究科・口腔外科学分野2）

歯周病がアルツハイマー病（AD）発症に関連することが多くの疫学研究で指摘され、近年、歯周病がいくつかの全身疾患の誘因・増悪因子となることを示す科学的根拠が集積されつつある。現在までに歯周病が、心血管系疾患、誤嚥性肺炎、糖尿病などのリスク因子となることが報告されている。歯周病がこれらの疾患に影響を与える分子機構として、①口腔内の歯周病原菌や菌体成分が、血行性あるいは経気道的に標的臓器に到達し直接作用する経路、②歯周病局所の免疫・炎症反応により産生されるサイトカインや熱ショック蛋白質に対する自己抗体などが、血行性に標的臓器に到達し作用する経路などが考えられている。しかし、歯周病の起因細菌が血液中に侵入することを示すエビデンスは多数存在するが、歯周病や歯牙欠損がアルツハイマー病など認知症の分子病態に本当に影響するのかどうか、また影響するとした場合に、どのような分子機構で認知症（脳内への影響）発症に影響を与えているのかは不明である。一方、すでに申請者らは、歯周病がADの分子病態に及ぼす影響と分子メカニズムを動物モデルを用いて解明した。すなわち、歯周病の慢性炎症が、脳内に波及し、それがADの原因分子であるAbeta産生・沈着を増加させ、サイトカインの上昇と相まって認知機能障害を誘導するのである（*NPJ Aging Mech Dis*, 3: 15, 2017で論文発表）。

ヒトにおいて歯周病と認知症発症の因果関係を明らかにするために、本研究では、認知症患者あるいは軽度認知障害の患者に歯周病治療・口腔ケアによる介入試験を行い、認知症進行抑止効果を検証した。

結果と考察：本研究では、認知症患者あるいは軽度認知障害の患者に対して、歯周病治療ならびに口腔ケアによる介入を行った。1年半後の中間評価ではあるが、有意差はなかったものの、介入群で認知症の進行が抑制されている傾向が明らかになった。これらの結果から、より多数の参加者を得て、健常高齢者において口腔ケア、歯周病治療の介入を行えば、認知症発症を抑制できることを明らかにできる可能性があると考えられた。